第一編　延岡の自然と歴史

城山の「歴代延岡城主の碑」

第一章　延岡市の自然環境

第一節　位置及び自然環境

宮崎県の北部に位置する延岡市は、平成の大合併により、平成十八年（二〇〇六）二月二十日、北方町・北浦町と、十九年（二〇〇七）三月三十一日、北川町と合併し、市域が従来のおよそ三倍となり、九州で二番目の広さとなった。

本市は東経一三一度二五分四三秒から東経一三一度五三分九秒、北緯三二度二九分二三秒から北緯三二度五〇分二〇秒の間にある。

東は日向灘に面し、北は佐伯市、西は日之影町、南は門川町、美郷町にそれぞれ隣接している。

さらに市域の最大の幅は、東西四七・六キロメートル、南北三八・六九キロメートルで、面積は八六八・〇〇平方キロメートルである。市の西部から北部にかけて、九州山地が県境に横たわっている。北から西へ中ノ嶺五四八・五メートル、桑原山一四〇七・九メートル、木山内岳一四〇一・二メートル、鹿納山一五六七メートル、速日の峰八六八メートル、烏帽子岳三六二メートルがあり市境をなしている。

一方、本市を貫流する主な河川は、五ヶ瀬川・祝子川・北川があり、これらの河川は、分流・合流しながら太

平洋にそそいでいる。

五ヶ瀬川はその源を向坂山に発し、阿蘇外輪山、高千穂町・日之影町を経て、本市内で五ケ瀬川、大瀬川に分流している。河口近くで祝子川・北川と合流し、日向灘にそそぐ長さ一〇六キロメートルの宮崎県第二の大河である。祝子川は源を五葉岳に発し、長さ三五キロメートルである。北川は源を傾山に発し、長さ五三・六キロメートルである。古くからこれらの河川は交通の手段として、また漁業を営む場として親しまれてきた。上水道・農業用水・工業用水・水力発電等にも利用され、市民生活とも深く関わっている。

市の中央部にある平野は、三河川によって堆積した扇状地性三角州で、規模は小さく丘陵や河川に分断されている。市の東部は黒潮の流れる太平洋で、土々呂から方財にかけては白砂の美しい海岸線が続く。東海から北浦にかけての日豊海岸は四万十層の山地が海に沈んでできたリアス式海岸である。砂岩と泥岩の互層は波の浸食にあい、奇岩をつくり日豊海岸の美しさを出している。このように、延岡とその周辺の海岸は岩石海岸と砂浜海岸が交互している。

延岡市周辺は、市北部から大分県との県境にかけては、屈曲の多いリアス式海岸で、急崖が海に臨み、沖合には大小の島々が点在している。また、延岡市地先の水深は、一〇〇メートルくらいまで緩やかな勾配であるが、一〇〇～一五〇メートルの間は勾配が急になり、一五〇メートルを超えると急に深くなる。

海岸線は、北部の南浦地区や北浦地区、南部の赤水地区は岩礁地帯が多く、中部は砂質帯である。延岡市中部には北川・祝子川・五ヶ瀬川が流入するため、河口部に小規模ながら段丘や三角州、沖積低地を形成しており、海岸には砂丘や砂州がある。

延岡市の地質的特徴は、本市はすべて四万十層群でできており、主に砂岩と頁岩（けつがん）（堆積岩の一種）で、それが

互層している。また部分的に弱い変成作用を受けた変成岩（変質輝緑岩、千枚岩など）・チャート・輝緑凝灰岩が見られるというところにある。

なお、現在の地域の地目別地積については、次の表のとおりである。

表　地目別地積

区分	年	平成15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
実数（ha）	総数	28,382.0	28,382.0	28,382.0	58,805.0	86,797.0	86,797.0	86,799.0	86,800.0	86,800.0	86,800.0
	田	1,230.6	1,220.0	1,214.6	1,784.2	2,055.5	2,014.6	2,004.9	1,991.6	1,978.4	1,967.1
	畑	769.0	749.9	742.4	1,243.7	1,371.1	1,313.8	1,300.0	1,288.1	1,278.8	1,271.4
	宅地	1,808.3	1,814.2	1,816.2	1,967.6	2,059.6	2,064.6	2,069.9	2,072.5	2,076.3	2,087.4
	池沼	8.7	8.8	8.7	9.4	10.7	10.7	10.7	10.6	10.9	10.8
	山林	6,709.2	6,748.9	6,704.4	12,836.9	19,321.0	19,337.1	19,354.9	19,656.8	19,745.9	19,703.2
	原野	1,845.9	1,834.6	1,814.2	2,261.6	2,630.0	2,618.2	2,542.6	2,334.4	2,282.9	2,271.9
	雑種地	1,082.5	1,075.3	1,076.8	1,228.2	4,429.3	1,474.8	1,467.5	1,445.6	1,454.3	1,453.2
	その他	14,927.8	14,930.3	15,004.7	37,473.4	54,919.8	57,963.2	58,048.5	58,000.4	57,972.5	58,035.0
構成比（%）	総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	田	4.3	4.3	4.3	3.0	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3
	畑	2.7	2.6	2.6	2.1	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
	宅地	6.4	6.4	6.4	3.3	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4
	池沼	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	山林	23.6	23.8	23.6	21.8	22.3	22.3	22.3	22.6	22.7	22.7
	原野	6.5	6.5	6.4	3.8	3.0	3.0	2.9	2.7	2.6	2.6
	雑種地	3.8	3.8	3.8	2.1	5.1	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7
	その他	52.7	52.6	52.9	63.9	63.2	66.8	66.9	66.8	66.8	66.8

各年１月１日現在　　（資料：延岡市資産税課）

（注）平成18年以降は、旧北方町・旧北浦町を、19年以降は、旧北川町を含む。

第二節　気　象

一　延岡市の気象概観

宮崎県は、日向灘に面し、暖流の黒潮が北上する位置にあるため、九州でも温暖多雨の地域である。その中で、本市は、県の北部沿岸に位置し、気温の平年値は一六・六度で、宮崎市や日南市に比べると一度～二度低い。降水量の平年値は二二九二・一ミリメートルで、大半は梅雨期と台風期に集中している。風向は、年間を通して西寄りの風が多く、夏場は海陸風の影響で東寄りの風が吹く。季節により海洋や山地の影響を受けやすい。

四季折々の気象の変化を月別に見ると、おおよそ、次のようになる。なお、統計期間は、昭和五十六年（一九八一）～平成二十二年（二〇一〇）で、延岡地域気象観測所での観測によるものである。

《一月》西高東低の冬型の気圧配置となり、年間を通じて気温が最も低くなる。乾燥した冷たい西寄りの風が吹き、晴天の日が続く。

《二月》一月と同様に西高東低の冬型の気圧配置となるが、次第に暖かくなる。

《三月》日増しに暖かくなり、動植物が活動を始める。低気圧が通過するとき、暖かい空気が流れ込むが、その後冷たい空気が流れ込む。このため霜の害が発生するので、農作物の管理には注意を要する。下旬には桜が開花する。

《四月》桜をはじめ植物の開花が盛んになる時期で、行楽のシーズンである。低気圧と高気圧が交互に通過するため、曇りや雨の日もある。

《五月》五月晴れの爽やかな日が多くなり、野や山は新緑に包まれる。

《六月》梅雨前線が北上するのに伴い、どんよりとした曇りの日が続く。時折、晴天の日があるものの、じめじめとした湿度の高い日が多い。月降水量の平年値が最も多く三五四・三ミリメートルである。

《七月》中旬頃までは、梅雨前線の活動が活発で、大雨に注意を要する。下旬頃には、梅雨明けをし、酷暑が訪れる。また、台風が接近しやすくなる。

《八月》台風が多く発生し、九州南部への接近数も多くなり、台風に注意を要する。気温が最も高くなり、最高気温の平年値は、三一・二度である。下旬には、太平洋高気圧が次第に後退するが残暑は厳しい。

《九月》夏から秋へと気圧配置が変わり、秋雨前線や台風の影響を受け、六月の次に月降水量が多く、平年値は三三四・八ミリメートルである。下旬には朝夕めっきり涼しくなる。

《十月》上旬に、秋雨前線による天気のぐずつきが終わる。その後、高気圧と低気圧が交互に通過する。やがて大陸からの高気圧が張り出し、空の澄んだ晴れた日が多くなり、過しやすくなる。

《十一月》秋から冬へ移り変わる月で、気温は日増しに低くなっていく。時折、小春日和の暖かい日もあるが、霜が降り始めるので、農作物の管理には注意を要する。

《十二月》朝夕の冷え込みが日を追って厳しく、時折、冷たい西寄りや北寄りの強風が吹く。空気も乾燥し、日差しも弱くなってくる。

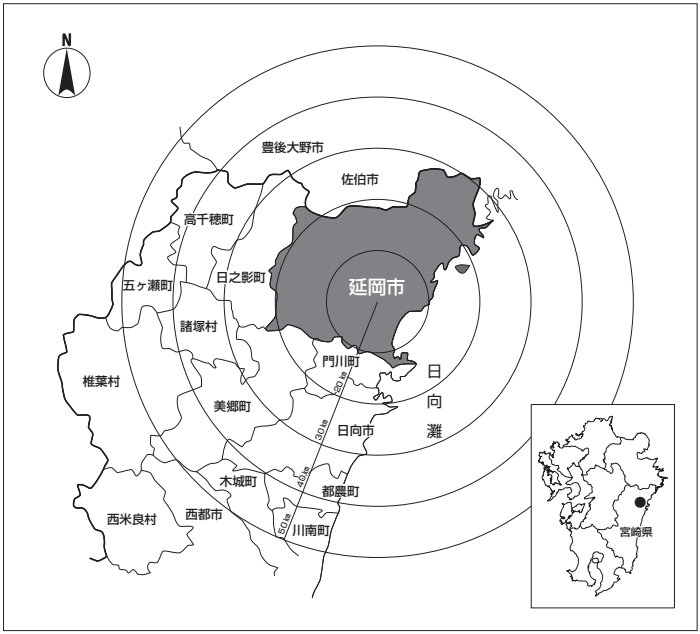
なお、延岡市の気象の月別平年値および延岡市の位置は、次の表・図のとおりである。

表　延岡市月別平年値

区分＼月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
現地気圧(hPa)		1018.2	1016.9	1014.9	1012.4	1009.4	1006.2	1006.0	1006.5	1009.4	1014.1	1017.5	1018.8	1012.5
海面気圧(hPa)		1020.8	1019.5	1017.5	1015.0	1011.9	1008.7	1008.4	1008.9	1011.9	1016.6	1020.1	1021.4	1015.1
気温	平　均(℃)	6.6	7.7	10.7	15.3	19.1	22.3	26.1	26.7	23.8	18.7	13.5	8.5	16.6
	最　高(℃)	12.4	13.5	16.2	20.8	24.1	26.5	30.3	31.2	28.5	24.2	19.3	14.6	21.8
	最　低(℃)	1.5	2.5	5.7	10.2	14.6	18.8	22.7	23.2	20.1	14.2	8.7	3.4	12.1
湿　　度（％）		63	63	67	70	76	83	83	82	80	74	72	66	73
降 水 量（mm）		53.7	74.1	164.3	214.5	242.9	354.3	264.4	269.8	334.8	180.0	94.6	50.3	2292.1
日照時間(時間)		188.6	172.4	173.7	183.3	179.7	137.1	194.2	202.2	157.6	177.9	166.8	191.3	2125.2
蒸 気 圧(hPa)		6.2	6.9	8.8	12.4	16.7	22.3	27.8	28.5	23.5	16.1	11.3	7.5	15.7

（注１）平年値とは、30年間の平年値をいい、10年ごとに更新する。　　（資料：宮崎地方気象台）
（注２）現在は昭和56年（1981）～平成22年（2010）の30年間の平年値を使用している。

図　延岡市の位置



第二章　延岡の歴史

第一節　延岡の歴史の概観

先史

延岡の最も古い歴史は、今から約三万年前で、後期旧石器時代の畑山遺跡（小川町）が確認され、剥片・剥片尖頭器が出土している。その他、後期旧石器時代（約三万年～一万二〇〇〇年前）には、ナイフ形石器文化期と細石器文化期の指標遺跡となっている赤木遺跡（舞野町）や吉野遺跡（吉野町）などが確認されている。また縄文時代（一万二〇〇〇年～二三〇〇年前）の遺跡としては、県内最古の貝塚と考えられる大貫貝塚（大貫町）や沖田貝塚（小野町）などがある。さらに、弥生時代（二三〇〇年～一七〇〇年前）の遺跡としては、竪穴住居跡六二軒（県北最大）を検出した中尾原遺跡（細見町）などがある。

古墳時代（一七〇〇年～一四〇〇年前）は、国指定史跡の南方古墳群（現存三八基）や県指定史跡の延岡古墳群（現存一八基）、北方村古墳（北方町）、宮内庁が陵墓参考地としている可愛山陵（えのさんりょう）（北川町）など多数の古墳が確認されている。特に菅原神社古墳（稲葉崎町）は、未調査であるが県北最大の前方後円墳と考えられている。また上ノ坊古墳（山月町）からは、全国的に類例のない三角板革綴短甲（さんかくいたかわとじたんこう）が出土している。

古代

古代の延岡市域は、律令制の時代に、臼杵郡に属することになり、「和名類聚抄」に見える英多郷や氷上郷は、延岡市域内に比定されている。また、今のところその存在が確認されていない郡衙（古代の郡の役所）跡は、須恵器を生産していた古川窯跡（古川町）や、墨書土器が出土した上多々良遺跡（岡富町・古川町）などの存在から、英多郷に郡衙があった可能性が高いと考えられる。さらに「延喜式」に見える長井駅や川辺駅も、北川町や大貫町にあったと考えられ、大宰府や都とを結ぶ重要な交通ルートとなっていた。

平安時代の中期になると、臼杵郡内には豊前国（大分県）宇佐宮の荘園が次々と成立し、五ヶ瀬川北部地域にあたると考えられる「臼杵郡内北郷」の荒野が、治暦二年（一〇六六）、国司菅原義資により宇佐宮に進上され、臼杵庄が立てられている。その後、臼杵庄内には寛治二年（一〇八八）に長井院（北川町）、長承年間（一一三二～一一三四）に岡富別符が立券（許可状）された。五ヶ瀬川南部地域は、「宇佐神領大鏡」などによると、「島津御庄領南郷」として、島津庄寄郡に編成されていた。これらのことから同じ市域内でも領主が異なっていたことがうかがえる。

中世

中世の延岡市域については、日向国（宮崎県）内の荘園・公領の全体像を示す唯一の史料「日向国建久図田帳」（一一九七頃成立）によると、宇佐宮領県庄の地頭には工藤祐経（伊東氏の祖）が、岡富庄の弁済使には土持宣綱（土持氏の祖）が、多奴木田の弁済使には宇佐公通の名前が記されている。また島津庄寄郡の新名と浮目の地頭には中原親能が、大貫と伊富形（伊形）の地頭には島津忠久（島津氏の祖）の名前を見ることができる。このような有力者たちの複雑な勢力争いが、鎌倉時代以降南北朝時代まで展開されるが、徐々に勢力を伸ばした土持氏が、ほぼ延岡市域一帯に、一定の勢力を持つことになった。

しかし、天正五年（一五七七）、日向国最大の領主であった伊東氏が島津氏との戦いに敗れ、豊後国（大分県）の大友氏を頼り退去すると、翌六年（一五七八）四月には大友宗麟が日向国への侵攻を開始し、土持氏の居城松尾城（松山町）を陥落させた。これにより延岡市域は、大友氏領となるが、十一月の高城・耳川の合戦で島津氏に敗れると、大友勢は、豊後国へ退却し、土持氏が、島津氏に旧領を安堵され、延岡市域は再び土持氏領となった。しかし、十五年（一五八七）、九州へ侵攻した豊臣秀吉が島津氏を破り、その所領を没収すると、土持氏は、再び所領を失い、新領主として、豊前国香春（福岡県）より高橋元種が入封した。

近　世

秀吉の国割により五万三〇〇〇石の石高で入封した高橋元種の所領は、延岡市域を含む宮崎県北部地域と、宮崎郡や那珂郡（宮崎市域の一部）、児湯郡（西都市域の一部）、諸県郡（国富町域）などの飛び地で構成されている。慶長八年（一六〇三）、元種は五ヶ瀬川と大瀬川に囲まれた川中地区の丘陵に県城（のちの延岡城）を築城し、城の東側に南町・中町・北町を整えたが、罪人隠匿の罪により同十八年（一六一三）に改易となった。

かわって翌年（一六一四）肥前国日野江（長崎県島原）より有馬直純が同じく五万三〇〇〇石で入封し、初代直純が元町・紺屋町・博労町を、二代康純が、柳沢町を整え、城下町を完成させた。三代永純のとき、元禄三年（一六九〇）、山陰村、坪屋村（現日向市東郷町坪谷）の農民による逃散事件が起こったため、四年（一六九一）有馬氏は、越後国糸魚川（新潟県）へ五万石で移封された。

なお、明暦二年（一六五六）、二代康純が城下の今山八幡宮（山下町）に寄進した梵鐘（初代城山の鐘）には、寄進者として「日州延岡城主有馬左衛門佐従五位藤原朝臣康純」の銘が刻まれており、現在確認できる「延岡」の初見史料となっている。

元禄五年（一六九二）には三浦明敬が下野国壬生（栃木県）より二万三〇〇〇石で入封し、岡藩との国境紛争

などを解決し、正徳二年（一七一二）三河国刈谷（愛知県）に移封された。同年三河国吉田より牧野成央が八万石で入封し、二代貞通のときに、岩熊井堰の築造と出北用水の開削などの大事業を行い、延享四年（一七四七）常陸国笠間（茨城県）に移封された。同年内藤政樹が陸奥国磐城平（福島県）より七万石で入封した。内藤氏の七万石の所領は、高橋氏が入封時の所領の大部分を引き継ぐとともに、牧野氏の時代に延岡藩領となった大分郡（大分市の一部）や国東郡（豊後高田市の一部）、速見郡（由布市の一部）の村々から構成されている。

内藤氏は、代々学問や文化を重んじ、日向諸藩にさきがけて藩校を設けるなど教育の振興にも力を入れ、八代藩主政擧のときに明治維新を迎えた。

近代・現代

現在の延岡市域は、明治四年（一八七一）七月の廃藩置県により延岡県となり、その後、府県の統廃合により同年十一月美々津県に、六年（一八七三）には宮崎県、九年（一八七六）には鹿児島県の所属となった。同県時代の十年（一八七七）に起こった西南戦争では、延岡市域も戦場となり、和田越では両軍による最後の決戦が行われた。このため、本市には、県指定史跡である南洲翁寓居跡（現在の西郷隆盛宿陣跡資料館）をはじめとする、西南戦争ゆかりの地が数多く存在する。

十六年（一八八三）には再び宮崎県となり、十七年（一八八四）に宮崎県東臼杵郡の所属となったが、二十二年（一八八九）の町村制施行により、延岡町・岡富村・恒富村・伊形村・東海村・南方村・南浦村・北方村・北川村・北浦村の一町九村が成立した。大正十二年（一九二三）に日豊本線が全線開通し、恒富村に日本窒素肥料株式会社延岡工場（現旭化成）が建設されると、昭和五年（一九三〇）延岡町は岡富村・恒富村と合併し、八年（一九三三）に市制を施行した。その後も、十一年（一九三六）に東海村・伊形村と、三十年（一九五五）には南方村・南浦

村との合併を行い、平成十八年（二〇〇六）には北方町・北浦町、十九年（二〇〇七）に北川町と合併した。

第二節　遺跡の発掘調査

本市における平成十五年（二〇〇三）度以降二十三年（二〇一一）度までの発掘調査の状況は、東九州自動車道建設、北方延岡道路建設など高速道路建設に伴うもの、および土地区画整理事業・城山公園整備事業・工業団地の造成に伴うものなどであった。

地区別の発掘状況については、旧延岡市地区では、岡富古川地区土地区画整理事業および多々良地区土地区画整理事業に伴う上多々良遺跡発掘調査、城山公園整備事業に伴う第二四次延岡城跡内堀調査（延岡営林署跡地）、延岡城内遺跡第一八次調査（延岡警察署跡地）、延岡城内遺跡第二一次調査（裁判所）、延岡城第二六次調査、「クレアパーク延岡」工業団地造成に伴う調査、その他吉野遺跡第八次調査、西階横穴調査等を行った。

また、北方地区では、県営農地保全整備事業に伴う上崎地区遺跡調査、北方延岡道路建設事業に伴う黒仁田遺跡調査、その他打扇通信施設建設に伴う上ノ原遺跡調査、農地改良に伴う曽木原遺跡調査を行った。

北浦地区では、東九州自動車道建設に伴う中野内遺跡、森の上遺跡、海舞寺（かいまいじ）遺跡、力（ちか）ラ石の元遺跡（熊野江町）、野地久保畠遺跡、市之串遺跡の調査を行った。

北川地区では、東九州自動車道建設に伴う家田（えだ）古墳群・家田（えだ）城跡の調査を行った。

これらの調査の成果の主なものとしては、旧延岡市地区では、上多々良遺跡調査で、延岡市域では初出土とな

る埴輪のある古墳や奈良・平安時代の蔵骨器・墨書土器が発見されたことが挙げられる。また、延岡城内遺跡調査で石垣の胴木を初めて検出したこと、さらに、今までほとんど発掘されていなかった北浦地区での海舞寺遺跡や、北川地区での家田城跡の発掘等によって、各時代における地域の変遷などが、明らかになってきたことなども挙げられる。

主な遺跡の発掘状況は、次のとおりである。

一　延岡城内遺跡

１　事業名　城山公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

２　所在地　延岡市本小路八五―二外

３　調査主体　延岡市教育委員会

４　調査期間（二四次調査）平成十七年（二〇〇五）六月十七日から同年十二月二十八日
（二五次調査）　十八年（二〇〇六）六月十六日から十九年二月九日

５　調査の概要

城山公園整備事業に伴い、延岡城内遺跡の発掘調査を実施し、延岡城の内堀跡、内堀の石垣、および石垣の基礎に据えた胴木を検出し、近世の木簡などが出土した。

６　出土遺構・遺物

(1)　二四次調査　江戸時代の堀底および幕末から明治期にかけての堀底を検出

内堀の石垣と、石垣の基礎に据えたマツ材の胴木（放射性炭素Ｃ14測定値：西暦一四二〇年）・荷札木簡・漆器椀（三つ葉葵紋・五七の桐紋入り）・木製船型などが出土した。

(2)　二五次調査　内堀の南壁と北壁を検出し、陶磁器類・瓦類・ほぼ完形の漆器椀が出土した。

7　総　括

調査の結果、延岡城で初例となる胴木が検出され、その伐採時期が放射性炭素Ｃ14の年代測定によって明らかになった。また、出土した荷札木簡に関係するとみられる記載が、古文書等の文献においても確認され、出土資料の年代と延岡城の存在時期が合致することが判明した。

内堀の石垣と基礎の胴木

三つ葉葵紋入り漆器椀

二　上多々良遺跡

1　事業名

岡富古川土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

２　所在地　延岡市岡富町字上多々良

３　調査主体　延岡市教育委員会

４　調査期間　平成　十七年（二〇〇五）度　五月十八日から三月三十一日
十八年（二〇〇六）度　六月二十二日から三月二十九日
十九年（二〇〇七）度　六月二十七日から三月七日
二十年（二〇〇八）度　一月七日から三月三十一日
二十一年（二〇〇九）度　四月十五日から十一月四日

５　調査の経緯

岡富町・古川町は、五ヶ瀬川が増水した際に、外水および内水による浸水害を被る地域となっていた。平成九年（一九九七）、これら自然災害や住宅環境改善を目的とした岡富古川土地区画整理事業が計画され、これに伴い、同計画地の試掘・確認調査を実施し、一〇基の古墳と二基の箱式石棺を確認した。

十七年（二〇〇五）度に岡富古川土地区画整理事業が都市計画決定を受け、本調査を開始した。調査地は、延岡市区画整理課が事業主体の予定地内の調査で、十七年度から二十一年（二〇〇九）度の五年間に約一万三四〇〇平方メートルを対象として調査を実施した。

６　出土遺構・遺物

(1)　1号墳　直径一七メートルの円墳。埋葬施設はくり抜き式木棺。鉄

発掘調査風景

剣二・刀子一・竪櫛二が出土

(2) 2号墳　直径一九・五メートルの円墳。埋葬施設は木棺（推定）。葺石を検出。壺形埴輪・高坏を含む土師器片・縄文土器片・石鏃・剥片尖頭器・敲石・鉄剣二・刀子二・鉄鏃の頸部一が出土

(3) 3号墳　直径一九・五メートルの円墳（構築墓壙）。埋葬施設は木棺。葺石を検出。壺形土器（埴輪）・鉄斧一・刀子一・高杯片を含む土師器片・姫島産黒曜石製の石鏃・流紋岩製の剥片尖頭器・敲石が出土

(4) 4号墳　直径八・九メートルの円墳。埋葬施設は木棺。土師器片が出土。埋葬施設（木棺直葬）から鉄剣一・ガラス製小玉四を検出

(5) 5号墳　直径約一〇・八メートルの円墳。埋葬施設は木棺。土師器片が出土。埋葬施設から鉄片一が出土

(6) 6号墳　直径約一一・二メートルの円墳。埋葬施設は消滅。土師器片が出土

(7) 7号墳　直径約九・八メートルの円墳。埋葬施設は箱式石棺。棺内から鉄剣一を検出。土師器片が出土

(8) 8号墳　直径約一〇メートルの円墳。埋葬施設は木棺。土師器が出土。埋葬施設内から鉄剣二、刀子一を検出。土師器を出土

(9) 9号墳　周溝が巡る約六メートルの円墳。埋葬施設は箱式石棺。周溝から高坏の脚部一。箱式石棺から唯一の方頭鏃一が出土

(10) 10号墳　長軸一四・五メートル、短軸約一〇メートルの方墳。埋葬施設は木棺。土師器が出土

(11) 11号墳　全長約四二メートル、後円部直径約二二メートル、前方部幅約二二メートルの前方後円墳。良好な葺石・溝状遺構を検出。箱式石棺が露出。土師器片が出土。本遺跡の首長墓

⑿ 12号墳　北約四・四メートル、東約四・一メートル、南約三・四メートル、西約四・六メートルの一部丸みを持った不定形墳。遺物の出土無し

⒀ 13号墳　直径約一六メートル、高さ二・四メートルの円墳。鉄斧一・鉄剣一・堅櫛四が出土

⒁ 住居址

① 1号住居址　一辺が約六・二メートルの正方形。五本柱跡・炉跡を検出。鉄鏃・土器片・勾玉が出土

② 2号住居址　一辺が約五・三メートルの平行四辺形状。四本柱跡・炉跡を検出。土器片出土

⒂ 土器埋設遺構

① 1号土器埋設遺構　直径約五五センチメートルの円形。掘下げ二〇センチメートル。大形弥生土器の壺が出土

② 2号土器埋設遺構　直径約五五～六五センチメートルの楕円形。掘下げ二〇センチメートル。大形弥生土器の壺が出土

③ 3号土器埋設遺構　直径約四五センチメートルの円形。掘下げ一〇センチメートル。大形弥生土器の壺が出土

⒃ 箱式石棺墓

① 1号箱式石棺墓　石棺　長軸約八〇センチメートル、短軸約三五センチメートル、深さ三〇センチメートル。両辺・蓋石は千枚岩。出土遺物無し

2号墳出土遺物（壺形埴輪）

②　２号箱式石棺墓　石棺　長軸約一・二メートル、短軸約五〇センチメートル、深さ五〇センチメートル。鉄鏃一が出土

(17)　土壙墓

①　１号土壙墓　楕円形。長軸二・四メートル、短軸最大一メートル、深さ三四センチメートル。出土遺物無し

②　２号土壙墓　楕円形。長軸二・一メートル、短軸最大一・二メートル、深さ一段目五〇センチメートル、最深部六五センチメートル。出土遺物無し

③　３号土壙墓　隅丸長方形。長軸二・三五メートル、短軸最大一・二メートル、深さ一段目三〇～六〇センチメートル、最深部までは四五～七四センチメートル。出土遺物無し

④　４号土壙墓　隅丸長方形。長軸約二・四五メートル、短軸最大一・三四メートル、深さ七〇センチメートル。出土遺物無し

⑤　５号土壙墓　楕円形。長軸二・四二メートル、短軸最大一・三六メートル、出土遺物無し

(18)　火葬墓

①　１号火葬墓　直径六五センチメートル、深さ一二～二四センチメートルの円形（推定）。須恵器壺（蔵骨器）・蓋、土師器杯（供献土器）を検出。蔵骨器の中に焼骨が納入

②　２号火葬墓　隅丸長方形。長軸一・八メートル、短軸最大一・二八メートル、深さ一〇～二一センチメートル。須恵器の壺五（うち二壺に焼骨納入）・土師器椀片一、台付椀片二が出土

⒆　土師器埋納遺構

土坑は、楕円形。長軸五五センチメートル、短軸最大五〇センチメートル、深さ一一～二二センチメートル。土師器杯九枚出土。このうち四枚に「左」の字の墨書を確認

7　総　括

今回の発掘調査により、上多々良遺跡は、主として弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代および中世にまたがる複合遺跡であることが明らかになった。

(1)　弥生時代終末～古墳時代初頭

この時代については、1号住居祉・2号住居祉が検出されている。これらは、地山の傾斜を利用し構築されており、北方町速日の峰地区遺跡や、日之影町平底遺跡で確認される構造であった。このような斜面地を利用する住居は、山間部で確認されているだけで旧延岡市では初めての検出であった。

なお、放射性炭素C14測定により1号住居祉は弥生時代終末期、2号住居址は古墳時代初頭の値を得ている。

(2)　古墳時代

古墳時代については、一三基の古墳が検出された。内訳は、円墳一〇基、前方後円墳一基、方墳一基、不定形墳一基である。2・3号墳で壺型埴輪、もしくはその可能性がある壺形土器が出土しており、埴輪の出土は延岡市で初となる。2号墳出土の埴輪と3号墳出土の壺形土器は古墳時代中期初頭と推察されている。

(3)　飛鳥・奈良・平安時代

飛鳥・奈良・平安時代については、二基の火葬墓が出土している。1号火葬墓は、素掘りの墓壙に埋設されており、土師器杯が供献されていた。須恵器の蔵骨器内には焼骨が納められており、分析から壮年後期から熟年期

の男性の全身からの骨が確認された。放射性炭素Ｃ14測定では、飛鳥時代から平安時代前期の値を得た。

２号火葬墓は、須恵器の蔵骨器二つと三つの須恵器の壺が供献されていた。中央の蔵骨器からは壮年後期から熟年期の男性と見られる骨が確認された。その東に位置する蔵骨器からは、性別は不明であるが、壮年後期から熟年期の全身からの骨が発見された。放射性炭素Ｃ14測定では、奈良時代末から平安時代前期の値を得た。

また、本遺跡から、素掘りの土坑内に九枚の土師器杯を一部裏返した形で、鉄宰を覆うように埋納された遺構を検出した。この九枚のうち、四枚の底面に「左」の墨書（口絵写真参照）を確認した。これら墨書土器の出土は延岡市で初となった。

(4)　中　世

調査区で唯一の水田部から大きな畦畔状の遺構を検出した。放射性炭素Ｃ14測定から十二世紀から十三世紀の値を得た。

このように、上多々良遺跡における今回の古墳群や箱式石棺墓の調査は、延岡市の西部に展開する南方古墳群・古川古墳（埋葬施設・阿蘇溶結凝灰岩）や、北に展開する延岡古墳群・樫山古墳群（埋葬施設・千枚岩）の境目にあたり、墳丘の形態や埋葬施設の状況から、延岡市の古墳時代の勢力状況や時代背景に一考を与える調査となった。また、埴輪の出土や、墳丘を伴う箱式石棺・丘陵上に築かれた住居址は、これまでの認識を覆すもので、今後の調査に一考を与える結果となった。

さらに古代の様相を考える上で、火葬墓・墨書土器・畦畔状遺構が検出されたことは、岡富・古川地区は、日向国臼杵郡英多（あがた）（のちに県（あがた））郷に比定され、ここに郡衙（ぐんが）（古代の郡の役所）が所在していたと想定されている。今回の調査の結果は、それを裏づける資料が得られることとなった。

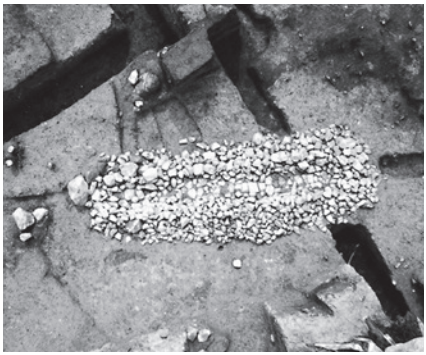
三　家田（えだ）古墳群・家田（えだ）城跡

１　事業名　東九州自動車道（県境～北川間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２　所在地　延岡市北川町長井字大門

３　調査主体　宮崎県教育委員会

４　調査期間　平成二十一年（二〇〇九）七月二十七日から同年十一月二十七日まで



２号墳主体部礫槨

２号火葬墓・供献土器検出状況

２号火葬墓出土蔵骨器・供献土器

５　調査の経緯

東九州自動車道（県境～北川間）の延岡市北川町長井から大分県境に至る延長一六・五キロメートルに及ぶ高規格幹線道路建設に伴い、平成十三年（二〇〇一）に予定路線内の分布調査が実施され、一五カ所の協議対象地について記録保存の措置を講じることとなった。これに伴い、家田古墳群・家田城跡については、二十一年（二〇〇九）四月から協議を始め、約四一〇〇平方メートルを対象に、同年七月から本発掘調査を実施することになった。

６　出土遺構・遺物

(1)　古　墳

①　1号墳　墳形はほぼ方形。長さ五・四メートル、幅約七メートル。鉄鏃・鉄剣四が出土

②　2号墳　墳頂部　くびれた隅丸長方形で長さ約七メートル、調査区内だけで幅四・五メートル以上。鉄鏃・鉄剣一が出土

③　3号墳　墳頂部　長さ約四メートル、幅四・五メートルの円形。刀子一出土

④　4号墳　楕円形を呈する墳形。墳頂部　長さ約三・八メートル、幅約四・五メートル。多数の炭化物が出土

(2)　城　跡

①　曲輪1　長軸九・五メートル、短軸五・〇メートル。面積四七・五平方メートル。標高五六・〇～五六・五メートル。平面は長方形

②　曲輪2　長軸五・八メートル、短軸四・〇メートル。面積二三・二平方メートル。標高五七・七五～

五八メートル。平面形は長方形

③　曲輪３　長軸一五・四メートル、短軸北端五・四メートル、中央五・〇メートル、南端二・二メートル。面積五八・五平方メートル。標高は五五・二五～五六・七五メートル

④　曲輪４　長軸三・四メートル、短軸一・三メートル、面積四・一平方メートル、標高四九・〇～四九・五メートル

⑤　犬走状遺構　調査で確認できた範囲での全長約一三・五メートル、幅平均一・二メートル弱

⑥　出土遺物　曲輪２と曲輪３の斜面から華南系と思われる端反茶碗一。曲輪３の西斜面から火打ち石一

７　総　括

(1)　家田古墳群

本古墳群出土鉄鏃の鏃身形態は、有頸鏃群は短頸の三角形鏃で、なかでも鏃身部の関（まち）（注）が二段のタイプがほとんどである。鉄鏃の組成は、主に三角形短頸鏃と柳葉鏃が大半を占める。三角形鏃身の短頸鏃と山形関である柳葉鏃（いわゆる鳥舌鏃）という組み合わせが確認できることから、本遺跡の鉄鏃は古墳時代の中期前半に位置付けることができる。

(2)　家田城跡

平成十六年（二〇〇四）の縄張り調査等の報告によると、家田城跡は、北側の尾根を堀切で断ち切り、独立させて築城する方法をとっており、最高所に位置する主廓を中心に、南北あるいは、北東・南西の方向にも曲輪群が展開している。

現状における家田城跡の規模は、主郭部分と考えられる最高所の曲輪が標高約八一メートル、最大幅南北約

一八〇メートル、東西約七〇メートルと南方向に伸びる尾根に沿って細長い様相を呈している。主郭部は六三二・五平方メートルと調査区内最大規模を誇った曲輪３の一〇倍以上の面積を有している。

縄張り図から読み取れる家田城跡の築城年代として推測できることは、頂上の主郭部分から階段状に曲輪を構築する方法は、十五世紀代に多く用いられる手法であり、家田城跡も主郭の南に三つの曲輪を階段状に配していることから、これに該当すると思われる。

（注）鏃（やじり）の刃部と茎（なかご）の境で段になる部位。

家田古墳群出土鉄剣

家田古墳群出土鉄鏃・刀子

調査区位置図（S=1/4500）（一部修正）　0　100m

家田城跡縄張り図（S=1/1400 2004.4.26 福田･堀田作図）
『南九州城郭研究』第３号より転載（一部修正）

調査区全景
（上空より）

四　黒仁田遺跡

１　事業名　一般国道二一八号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２　所在地　延岡市北方町字子

３　調査主体　宮崎県教育委員会

４　調査期間　平成十八年（二〇〇六）五月八日から同年十二月八日まで

５　調査の経緯

一般国道二一八号北方延岡道路整備事業は、平成八年（一九九六）度に高規格道路として事業化され、六年（一九九四）の詳細分布調査の成果を踏まえ、協議を開始し、試掘調査を実施した結果、記録保存の措置をとることとなった。これを受け本発掘調査は、調査対象区一万二〇〇〇平方メートルを実施した。

６　出土遺構・遺物

(1)　旧石器時代

第Ⅰ期（姶良Ｔｎ火山灰層〈第Ⅳ層〉上位のⅦ層中部）　ナイフ形石器二、剥片尖頭器二、スクレイパー（削器）一、剥片類六七の合計七二を出土

黒仁田遺跡全景

第Ⅱ期（Ⅵ層上部）　細石刃九、細石刃核二五、スクレイパー一二、敲石二、磨石一、剥片類七四四の合計七九三を出土

(2)　縄文時代早期　集石遺構を検出。土器三、石鏃八、石匙一の合計一二を出土

(3)　弥生時代～古墳時代

第Ⅰ期（弥生時代終末から古墳時代初頭）　遺構としては、竪穴住居跡を四軒、土坑一基を検出。遺物としては、甕・壺・鉢・手捏土器・杓子状土器・鉄器・石包丁・砥石・磨石・敲石・台石・高杯・石錘を出土

第Ⅱ期（古墳時代前期から中期）　遺構としては、竪穴住居跡七軒、土坑三基を検出。遺物としては、甕・壺・小型丸底壺・鉢・手捏土器・鉄器・石庖丁・砥石・敲石・磨石・台石・高坏を出土

第Ⅲ期（古墳時代後期）　遺構としては、地床炉のみの検出。遺物としては甕を出土

接合資料（旧石器時代）

7　総　括

旧石器時代の第Ⅰ期は、ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群であるが、量的に少なく散漫な状態であった。遺物は合計七二点で、器種別の内訳は、ナイフ形石器二点、剥片尖頭器二点、その他は剥片類である。石材別の内訳は、流紋岩六一点、ホルンフェルス（変成岩の一種）一一点で、第Ⅰ期の特徴的な石器は全て本遺跡の

眼下に位置する五ヶ瀬川で採集可能な流紋岩である。第Ⅰ期の編年的位置づけとしては、宮崎県旧石器文化談話会の設定した編年の第５段階に相当すると考えられる。

旧石器時代の第Ⅱ期は、細石刃石器群を中心とする本遺跡の旧石器時代の主体で、石器石材においては、流紋岩だけでなく、黒曜石製石器も多数出土している。編年的位置づけとしては、技術的な面から、細石刃期後半に相当すると考えられる。

縄文時代早期については、遺構として、集石遺構一基を検出し、遺物としては、チャート（堆積岩の一種）製の石鏃八点、石匙一点を出土している。本遺跡一点のみ出土の石匙は、つまみから身が横に広がる横型で、石材はサヌカイト（讃岐石）である。遺跡周辺では採取不可能な石材のため、持ち込まれたものと考えられる。また遺構・遺物の分布は極めて疎であり、本遺跡においてこの時期は、活動が希薄であったものと考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけて存在した集落については、以下のとおりである。

第Ⅰ期の弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落は、竪穴住居跡四軒、土坑一基で、丘陵上の台地平坦面に集中し、比較的散漫な状況で分布している。

第Ⅱ期の古墳時代前期から中期にかけての集落は、竪穴住居跡七軒、土坑三基で、丘陵上の台地平坦面と台地頂部付近の二カ所に分かれている。集落の中心は、調査区外の北側部分だと考えられる。

第Ⅲ期の古墳時代後期の集落は、地床炉のみの検出で、詳細は不明である。

以上のことから本遺跡は、主として弥生時代終末から古墳時代中期にかけて活動した跡があり、住居等の切り合いもなく、比較的散漫な状態で分布していることから、一時期、あるいは短期間のみ営まれていた集落と考えられる。

五　海舞寺（かいまいじ）遺跡

１　事業名　東九州自動車道（県境～北川間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２　所在地　延岡市北浦町古江字海舞寺

３　調査主体　宮崎県教育委員会

４　調査期間　平成二十年（二〇〇八）六月十六日から同年十月二十日まで

５　調査の経緯

東九州自動車道県境～北川間の延長一六・五キロメートルの高規格道路建設に伴い、埋蔵文化財分布調査を実施し、その結果、一四カ所約六万五〇〇〇平方メートルを調査対象とし、発掘調査の措置を講じることになった。

６　出土遺構・遺物

(1)　旧石器時代～縄文時代早期　砂岩破砕礫を少量出土

(2)　縄文時代後期～晩期　砂岩製剥片二・石核一・磨石・凹石を出土

(3)　古墳時代～古代　遺構の検出なし。古墳後期の土師器杯、古代と見られる須恵器甕を出土

(4)　中　世

遺構は、掘立柱建物跡一二棟・土坑一基を検出

遺物は、土器・陶磁器類（白磁碗・青磁碗・須恵器片口鉢・瓦質の羽釜等）、石器・鉄器類（水晶製火打石・鉄製刀子）、銭貨二五枚を出土。銭名が判読できたのが二一枚あり、その初鋳年は、九六〇～一二〇五

年となり、このうち一七枚は北宋銭である。その他、自然遺物として、植物種子（イネ・ムギ・マメ類・アワ近似種・ヒエ近似種・モモ・キビ・オオムギ・コムギ・ソバ等）を出土。貝（ハマグリ・ヒメクボガイ・ウズイチモンジ・レイシガイの海産食用貝）を出土。集落より離れた1・2号横穴周辺でも、備前焼大甕・擂鉢（すりばち）、漳州窯皿（しょうしゅうようさら）、景徳鎮碗などを出土

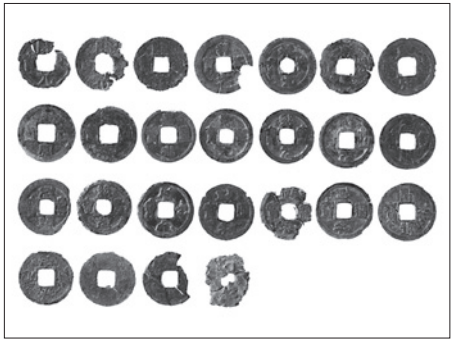
(5)

近世以降

遺構は、円形土坑八基、石組遺構二基を検出

遺物は、備前焼擂鉢、肥前系の大甕・甕・碗・皿・溝縁皿・端反皿・二彩唐津、瀬戸大窯折縁皿・縁釉皿、堺産擂鉢等の国産陶磁器を大量採集。その他徳島県大田井産チャート製火打石を出土

集落域の中世の遺構面状に載っている造成土からは、アワ近似種・イネ・オオムギ・キビ近似種・コムギ・ヒエ近似種・マメ類・ムギ類等を回収



出土銭貨

7　総　括

本調査では、主に中世集落が検出され、この他にも縄文時代から近代にかけての遺物が出土した。

中世集落については、集落立地上で有利な緩斜面の中心というよりも山寄りの狭い谷部分に調査区が相当したこと、掘立柱建物跡はいずれも小規模であり、主となるような規模・構造の建物がない特徴がある。

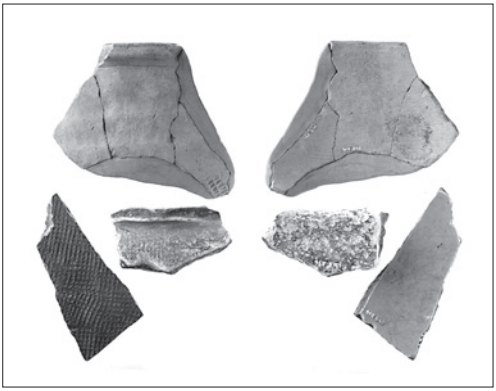
遺物は、約半数が中世のもので、ピット（柱穴）出土土器・陶器が三八点あり、そのうち中世のものが八四パー

セントと大半を占めていた。内容も豊かで十一世紀後半から十三世紀代の比較的古手の一群である玉縁口縁の白磁碗・龍泉窯青磁碗や石鍋・東播系須恵器片口鉢・北宋銭、周防型羽釜、周防型足釜に相当する瓦質の羽釜の存在は、西日本広域に及んだ交易によって北浦地域にもたらされたもので、たいへん注目される。特に瓦質羽釜は、宮崎県域ではほとんど知られていず、貴重な発見となった。

十四世紀以降についても青磁碗・白磁皿や青花、備前焼四耳壺・擂鉢・大甕等や土師質の鍋・釜、須恵器の甕・片口鉢、瓦質の壺・甕等とバラエティーに富み、流通品が一定数集まる集落であったことを窺わせている。一方で、土師皿が一点のみと少ない点は特徴の一つと見ることができる。

また、今回の調査の特筆点として、全体の七〇パーセント近いピット等の埋土をフローテーション法（注）の対象にすることができたことで、現地での試料回収の段階では、炭化種子等が視認できず、期待できる様子ではなかったが、最終的に予想を大きく上回る炭化種実を回収できたことが挙げられる。本調査区では、野生植物の種子が圧倒的に少なく、栽培植物の回収が主であった。これは、居住空間にムギ類等の栽培植物が持ち込まれ、雑草種子も一部入りこんで炭化したものと思われる。ハマグリ等の海産食用貝とともに、中世の食糧事情を示す好例となった。

（注）フローテーション法とは、土を水に浸け、余分な土は沈殿させ、浮いてきた炭化物（炭化種子など）を取り出す手法。専用の機具がある。



中世土器類

第三章　神　　話

第一節　神　　話

平成二十四年（二〇一二）は、和銅五年（七一二）に古事記が編さんされて、一三〇〇年という記念すべき年にあたり、全国的に神話に対する関心が大いに高まった年であった。

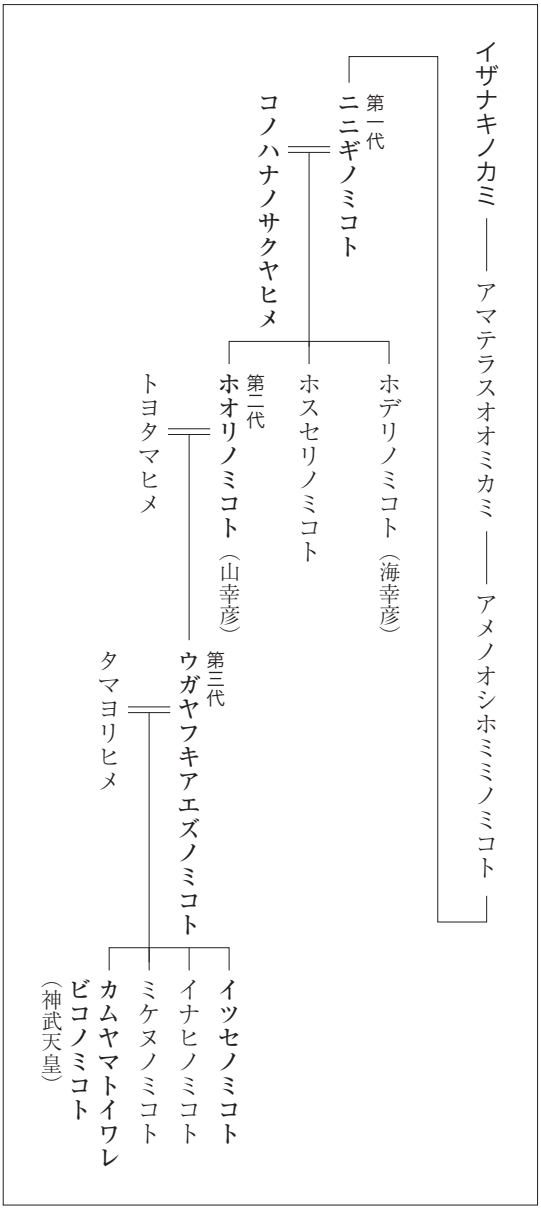
ところで、延岡地方にも神話に関する地名がある。それらは、笠沙（かささ）・可愛（え）・速日（はやひ）などの地名であり、記紀にまつわる神話が各地に残っている。神話は、貴重な精神的な文化遺産として代々語り継がれてきたものであり、今後も後世に伝えていく必要があると思うので、本市に関する主な神話を紹介する。ただし、引用文以外の神名は、すべてカタカナ表記とする。

一　神々の系譜

郷土の神話を理解する上で、神々の系譜を知っておくことは大切なことなので、次に掲げる。

イザナキノカミの子がアマテラスオオミカミで、アマテラスオオミカミの孫が、**ニニギノミコト**である。ニニ

ギノミコトとコノハナノサクヤヒメとの間に生まれたのが、ホデリノミコト（海幸彦）、ホスセリノミコト、ホオリノミコト（山幸彦）である。ホオリノミコトとトヨタマヒメとの間に生まれたのが、ウガヤフキアエズノミコトである。ウガヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメとの間に生まれたのが、イツセノミコト、イナヒノミコト、ミケヌノミコト、カムヤマトイワレビコノミコト（神武天皇）である。特にニニギノミコト、ホオリノミコト、ウガヤフキアエズノミコトのことを日向三代という。



二　神話と地名

1　ニニギノミコト・コノハナノサクヤヒメと笠沙の岬（愛宕山）

日向の高千穂の櫛触岳に降臨したニニギノミコトが、コノハナノサクヤヒメと出会った笠沙の岬は、「古事記」では、次のように書かれている。（「宮崎県史　別編　神話・伝承資料」より引用）

「於是、詔之らさく『此地者、韓国に向ひ、**笠沙之御前**に真来通り而、朝日之直刺す国、夕日之照る国なり。故、此地は甚吉き地。』と詔らし而、底津岩根於宮柱布斗斯理、高天の原於氷椽多迦斯理而坐しき」

「於是、天津日高日子番能邇邇芸能命、**笠沙の御前**於麗しき美人遭ひたまひき。しかして、問ひたまはく、『誰が女そ。』ととひたまへば、答へて白之さく、『大山津見神之女、名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毘売と謂ふ』とまをす。」

これらの文章の意味は、概略次のようなものになるかと思う。

ニニギノミコトが、笠沙の岬をお通りになった。「ここは、朝日が直射し、夕日が照り映えるよい所だ」と言って、御殿をお建てになった。ところが、ここで、たいへん美しい女性と出会ったのである。それで「誰の娘か」と問うたところ、「私は大山津見神の娘で、名前は、神阿多都比売、またの名は、木花之佐久夜毘売と申します。」と答えたということである。

ところで、「宮崎縣史蹟調査」第七輯（昭和四年）には、本市の愛宕神社の由来として、次のようなことが書かれている。

「本社は延岡城山に年時不詳勧請したのであって、慶長元丙千年高橋右近将監城を築くに当り社を現地へ移奉し神社に因んで愛宕山と名けた、該山は当時迄笠狭の岬と云しと伝」と。このことによって、今の愛宕山は、四〇〇年以上前までは、笠狭（沙）の岬と言われていたことが分かる。愛宕山と言われるようになったのは、延岡城を築くにあたり、城山にあった愛宕神社を笠狭（沙）の岬（愛宕山）に移したからで、以後愛宕山というようになったという。

また、安藤通故編「日向国名所歌集」によれば、高橋氏の後に延岡藩主となった有馬氏の二代目の康純（在位一六四一～一六七九）は、次のような歌を詠んでいる。（振り仮名筆者）

時鳥晴れぬおもひを五月雨の雲の笠沙の山に鳴くらむ

歌の意味は、「ほととぎすよ。お前も切ない思いを胸に、五月雨の雲のかかる笠沙の山で一途に鳴き続けるのであろうか」というところであろう。康純の詠んだ笠沙の山は、当然愛宕山のことと思われる。

以上のように、愛宕山は、古くは笠沙の岬または笠沙の山と言われており、これらのことからニニギノミコトとコノハナノサクヤヒメとの出会いの地は、本市の愛宕山ではないかということになるのである。

2　ニニギノミコトと可愛

日本書記では、ニニギノミコトの埋葬地として、次のように書かれている。（「宮崎県史」（同右）より引用）

「久にありて天津彦彦火瓊瓊杵尊朋りましぬ。因りて筑紫日向可愛此をば埃と云ふ。之山陵に葬りまつる」

これによれば、ニニギノミコトは、筑紫（九州）の日向の「可愛」というところに葬られたことになる。

ところで、本市の北川町には、可愛岳・可愛神社等がある。それでは、この可愛という地名は、いつごろから

言われるようになったのであろうか。「北川町史」（平成十六年刊）によれば、現在の俵野の成就寺のあるところは、以前は可愛寺という寺があり、十代の崇神天皇および十一代の垂仁天皇が、ニニギノミコトの可愛山陵を奉祭するために、勅使（天皇の御使）が参向したとき、仮泊所としたところであると伝えられている。それで、同地は、十代屋敷又は御殿址と称され、その後霊跡として神聖視され、庶民が居住することはなかったという。

このようなことから、この地は、かなり古くから、可愛と呼ばれ、ニニギノミコトの御陵地と信じられていたということができる。

それでは、一体どこが御陵かということであるが、「北川町史」（平成十六年刊）によれば、「古来地元でも政府が定めた山陵の伝説地（注・現在の陵墓参考地）と、古くから信仰の地とされてきた可愛岳とする大方二つの大きな見解があった。」という。また「宮崎縣史跡調査」の「可愛神社」の項によれば、「ニニギノミコトの崩御があって、可愛山頂に埋葬したところを鉾岩と云う。ここに崇神天皇の御宇に社殿が建立されたが、参路が峻嶮で参拝が至難のため、平易な地へ社を創建して、そこから遥拝したのが始まりである」という。一方、現在の陵墓参考地は、延岡市史（石川恒太郎）によれば、かつては経塚と呼ばれていた古墳で、内藤家十二代延岡藩主内藤政韶がニニギノミコトの御陵として比定し、明治十六年（一八八三）に、宮内省から大沢清臣の派遣、二十六年（一八九三）にも種々の調査があり、その結果、御陵墓は、二十八年（一八九五）十二月四日「御陵墓伝説地」となり、大正十五年（一九二六）に「陵墓参考地」（皇室陵墓令施行規則〈大正十五年宮内省令〉）と改称された。

ちなみに、「日向国名所歌集」（安藤通故編）によれば、竹石道清（武石道生の誤りか）が「可愛山陵」として、次のような歌を詠んでいる。

天の原神上ります其の神のにゝき尊のみさゝきそこれ

３　ニギハヤヒノミコト・ニニギノミコトと速日の峰

ニギハヤヒノミコトは、ニニギノミコトより先に降臨した天つ神で、神武天皇が東征し大和に行ったときに、登美毘古を従え、天津瑞（天つ神の子孫であることの印）を献上して、神武天皇に仕えた方である。

ところで、「北方町史」（昭和四十七年刊）によれば、和銅六年（七一三）の「日向風土記逸文」には、次のように書いてあるという。

「臼杵郡速日郷　此処有山　云速日峯　往昔日の神御孫瓊々杵尊兄饒速日尊到坐此山峰　故云速日」

意味は、「臼杵郡の速日の郷、此処に山有り。速日の峰と云う。昔、日の神（アマテラスオオミカミ）の孫のニニギノミコトの兄のニギハヤヒノミコトがこの山に到りて坐す。故に速日と云う。」ということであろう。

また、正徳二年（一七一二）に成立した「和漢三才図絵」には、次のように書いてあるという。

「日向速日峰　天孫天速日瓊々杵尊　率諸神　降之地名」

意味は、「日向の速日の峰は、天孫ニニギノミコトが諸々の神々を率いて天降ったところの地名である」ということであろう。

さらに、土御門院（一一九五～一二三一）の御製に、次の歌があるという。

かたぶかぬ速日の峰に降ります神の御孫のくにぞわがくに

歌の意味は、「日の光の衰えない速日の峰に天降った天孫ニニギノミコトの国であるよ。わが国は」ということになろう。

これらの史料から、本市の北方町にある速日の峰は、ニギハヤヒノミコトについては、少なくとも奈良時代以前から、ニニギノミコトについては、鎌倉時代以前から、中央においても、それぞれの降臨の地と信じられてい

たということができる。

4　イツセノミコトと五ヶ瀬川

ウガヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメとの間に四人の皇子が生まれる。すなわち、イツセノミコト（五瀬命）、イナヒノミコト、ミケヌノミコト、ワカミケヌノミコト、またの名は、カムヤマトイワレビコノミコトすなわち神武天皇である。つまり、イツセノミコトは、神武天皇の長兄ということになる。これらの四皇子が生まれたのが、高千穂町の四皇子峯（しおうじがみね）であるという。ちなみに、イツセノミコトは、神武天皇とともに東征するが、青雲（あおくも）の白肩津（しらかたつ）（大阪湾の沿岸部）で、登美毘古（とみびこ）と戦ったときに負傷し、その傷がもとで男之水門（おのみなと）で戦死した方である。

ところで、石川恒太郎著の「県北新風土記・地名の由来」によれば、安藤通故（みちふる）などによって、次のような歌が詠まれているという。

可愛（え）の山は霞にきえて打けむり五ツ瀬の川に春雨ぞ降る　　安藤通故

五ツ瀬川みかさまさりて高千穂のみねにただよふさみだれの雲　　芦谷充房

前者の歌の意味は、「可愛の岳は、霞のように消え去り、まるで煙っているように見える。一方、五ヶ瀬川には春雨が降っているよ」、後者の歌の意味は「五ヶ瀬川は、水量が増している。一方、高千穂の峰には五月雨の雲が漂っているよ」ということであろう。

安藤通故は、松田仙峡（せんきょう）著の「延岡先賢伝」（昭和三十一年刊）によれば、一八三三年から一八九八年にかけての延岡の国学者なので、これらの歌により、当時は、五ヶ瀬川は、五ツ瀬川と呼ばれていたこと、また、それぞ

れの歌に神話と関わりの深い地名「可愛の山」、「高千穂のみね」が、五ヶ瀬川との関係で詠まれていることから、五ヶ瀬川は、江戸時代以前から五瀬命の名前にちなむものと思われていたことがうかがわれる。

５　ヤマトタケルノミコトと行縢

ヤマトタケルノミコトは、第十二代景行天皇の皇子で、景行天皇の命を受けて、日本国内を平定するために、東奔西走し、最後は力尽きて能煩野（三重県）で亡くなった方である。

ところで、安政二年（一八五五）に藩の寺社奉行に差し出されたと思われる「行縢神社由来記」（宮崎県史別編　神話・伝承資料）には、次のようなことが書かれている。（カタカナはひらがな表記とし、難読漢字には振り仮名を付す）

「人皇十二代景行天皇御宇日本武尊、是国熊襲を征し給う時、川上梟帥豪勇にして輙く誅し給事不能、海上を巡り給ひ遥当山を見給ひ、東海浦人に船を寄させ、浦人に問せ給に神代昔し面足尊、惶根尊現身て立給ひ、長久鎮坐向脛山てふ尊神山也と答奉。如故日本武尊御自其浦人に御宣有て鰭広物鰭の狭物を取持せ麓成る野添と言所に祭殿を営山大地成雛々の物迄構山成為集させ、面足尊　惶根尊及天神地祇七日七夜御饗祭奉御祈念坐歌

能々比伎乃矢羽津之多気乎以弓美礼波　可波加身多化留於智弓那加留流

如此詠て出立給う。此所を歌野原と言也。時に神の御教有宣のり随意日本武尊梟帥か酒宴の宿に交り女の姿に身を替、酒を呑せ酔臥たる所を懐中の刀抜放し、梟帥か咽を指通給い、指れ乍にして勇余吾に増れるかの強き神は何の神にて坐すや、答て曰吾は則景行天皇の御子小細（小碓の誤りか）尊也と被仰けれは、吾増礼にる（「吾に増礼る」の誤りか）君なれば、是より名改、日本武尊名乗給へと申被誅罰せたり。思も勝軍御祝に御幡を振せ給

所を振野村也。舞を成され給よりて舞野村也。暫住給所竹宮と言、祭神日本武尊年々霜月卯辰祭礼種々古事遺れり。」

概略の意味は、「十二代景行天皇の時代、ヤマトタケルノミコトが熊襲を退治しようとしたとき、川上梟帥という者が豪勇のため、簡単には誅殺することができなかった。ヤマトタケルノミコトは、海上を巡って遥かに当山（行滕山）をご覧になり、東海の浦人に船を寄せさせ、あの山は何という山なのか浦人に尋ねさせたところ、神代の昔、面足尊（おもだるのみこと）・惶根尊（かしこねのみこと）が現れて、長く鎮座する向脛山（むかはぎやま）という尊い神山であると申し上げた。そこでヤマトタケルノミコトは、自ら浦人におっしゃって鰭（ひれ）広物や鰭の狭物を取り寄せ、麓の野添というところに祭殿を営み、山や大地に成る物を山と成るまで集めさせて、面足尊（おもだるのみこと）・惶根尊（かしこねのみこと）や天神地祇（てんじんちぎ）を七日七夜饗祭しご祈念され、次のような歌を詠まれた。

布引（ぬのひき）の矢筈（やはず）の滝を射（い）てみれば　川上梟帥（かわかみたける）落ちて流るる

（歌の意味は、「白波が立って布を引いたように見える矢筈の滝〈行滕の滝の別名〉を弓で射たところ、熊襲（くまそ）の頭（かしら）である川上梟帥が滝から落ちて流れて来るよ」といったところであろう。）

ヤマトタケルノミコトは、このように歌を詠まれて出立された。ここを歌野原と言う。時に神のお告げがあり、その意に随い、ヤマトタケルノミコトが川上梟帥の酒宴の宿に紛れ込み、女装して酒を呑ませ川上梟帥が酔いつぶれたところを、懐の刀を抜いて、梟帥の咽（のど）を刺しぬかれた。

梟帥は、刺されながらも「勇猛が私に勝っている強いあなた様は、どちらの神でいらっしゃいますか。」と聞いた。ヤマトタケルは、それに答えて、「私は、景行天皇の皇子で、小細の尊（正しくは小碓尊（おうすみこと））である」といった。それに対し、川上梟帥は、私より勇猛なあなたは、これからは名前を改め、ヤマトタケルノミコトと名乗り

なさいと言って殺された。それで勝ち戦の祝いに幡をお振りになったところが振野村である。舞を舞われたところが舞野村である。しばらく住まわれたところが竹宮（今の下舞野神社のあるところ。昔はこの神社を武宮神社と言った）と言う。ここの祭神は、ヤマトタケルノミコトで、毎年霜月（十一月）に祭礼を行い、今でも様々な古事が残っている」ということになろう。

同文書には、正徳三年（一七一三）正月十五日の日付が入っているので、原本は、少なくとも同年以前に書かれ、それを代々書き写してきたものと思われる。ちなみに、同年は、延岡藩主が三浦氏から牧野氏に代わった翌年で、藩は、各神社仏閣に由緒書きを提出させたものであろう。

このように、すでに江戸時代前期から、ヤマトタケルノミコトと行縢の神話は存在していたということが言える。

6　イザナキノカミと中の瀬

黄泉国から帰ったイザナキノカミは、身を清めるために、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原で禊祓を行うが、そのとき上の瀬は、流れが速く、下の瀬は流れが弱いと言って中の瀬でそれを行った。

ところで、山口徳之助著の「延岡大観」（大正十四年刊）に引用されている樋口種美（実の誤りか）の「橘小門阿波岐原中ツ瀬」には、次のように書いてある。

「日向の国中にて、水の清きことを尋ぬるに、此中ツ瀬川が限れり、常に底清みて、かりにも濁をうけず、此水に付ても、種々の奇事あり、（略）中ツ瀬を、いま中の瀬といへり、水を撰び給ふ事、記紀の御傳にもれたれども、所を撰び、流れを撰び給ふにて、水を撰み給ふことは明也、されば、日向の国中にて、大御禊の地は、此中ツ瀬に必せり。」

このように、樋口種美は、イザナキノカミの禊祓の地として、本市の中の瀬しか考えられないと述べている。また、中の瀬には、現在、祓川（はらいがわ）という川の名も残っている。

樋口種美は、郷土の国学者樋口種実（一七九三～一八六四）のことと思われる。そうであれば、すでに江戸時代の後期において、現在の本市の中の瀬町あたりがイザナキノカミの禊（みそぎ）の地と考えられていたと言える。

7　ホオリノミコトと祝子（ほうり）川

ニニギノミコトとコノハナノサクヤヒメとの間に生まれたのが、ホデリノミコト（海幸彦）、ホスセリノミコト、ホオリノミコト（山幸彦）の三神である。

コノハナノサクヤヒメが子どもをみごもったことを、ニニギノミコトに告げたとき、一夜でみごもったのは、わたしの子どもではなく、国つ神の子ではないのかと疑った。疑われたコノハナノサクヤヒメは怒って、あなたの子であれば、天つ神の子だから無事に生まれるでしょう。もし国つ神の子であれば無事には生まれないでしょうと言って、出入口の無い八尋殿（やひろどの）を作り、内側から土で塗り塞いだ。そして子どもがいよいよ生まれる段になって、火を付けた。火が勢いづいたときに、生まれたのが長男のホデリノミコト（火照命）後の海幸彦、火が最も盛んなときに生まれたのが、ホスセリノミコト（火須勢理）、火の勢いがおさまりかけたときに生まれたのが、ホオリノミコト（火遠理命）後の山幸彦である。このとき、コノハナノサクヤヒメが、火を放って出産したところが、火生野（ひうの）。それが転訛して俵野（ひょうの）（北川町）になったとも言われている。

海幸彦（ホデリノミコト）は、海で魚を捕って暮らし、山幸彦（ホオリノミコト）は、山で獲物を捕って暮らしていたが、あるとき山幸彦が、それぞれの道具を交換しようといって、それを交換した。ところが、山幸彦は、

さっぱり魚が捕れないどころか、兄の大事にしていた釣り針をなくしてしまう。それで自分の十拳剣（とつかのつるぎ）を打ち砕いて、代わりの釣り針をつくって詫びるが許してもらえず、ついにワダツミノカミの宮殿に行き、何とか釣り針を見つけることができた。そのとき、出あったのがトヨタマヒメで、その間に生まれたのがウガヤフキアエズノミコトである。このウガヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメとの間に生まれたのが、カムヤマトイワレビコノミコト、すなわち神武天皇である。

ところで、本市の大崩山の麓を流れる祝子川は、ホオリノミコトが産湯を使ったところで、川の名は、このホオリノミコトにちなむものであるといわれている。

ちなみに祝（ほうり）の地名は天永元年（一一一〇）のこととして、「今山八幡宮旧記」に出ているので、すでに平安時代からあった延岡でも古い地名のひとつであると言うことができる。

このように、本市を囲むように連なる山々、また、その間を流れる川には多くの神話が残っており、改めて本市が、精神文化の豊かな地であり、また、それがかつては延陵（えんりょう）と称された所以（ゆえん）ではないのかと思われる。